

# 知覚動詞「見える」と

## 「聞こえる」「見える」の語彙的意味について

島山真一

本論文は、最も典型的な知覚動詞である「見える」と「聞こえる」をターゲットとし、その語彙的な意味を分析することを目的とする。

「見える」と「聞こえる」はスル形で発話時を指示することが可能であるという意味で「ある」や「いる」のような状態動詞的なふるまいを見せ、その一方で、状態動詞には見られない開始を表現する局面動詞ハジメルとの承接を許し、感覺的な把握の開始局面を指定可能である。次の例文を見よ。

- (1) a \*テーブルの上にコーヒーカーップがありハジメタ。<sup>(注1)</sup>

b その山脈の麓、黄いろい材木の積まれてあるあたりに、低い工場が見えはじめた〔隠火〕。

c やがて、家々の戸が勢いよく開いて、学校へ行く子供の声が路に聞こえはじめた〔ある心の風景〕。

(1b)と(1c)が見せるハジメルとの承接可能性は、状態動詞ではなく動態動詞を持つ典型的な性質である。

本論文は、先述したような状態動詞と動態動詞の性質を併せ持つ「見える」と「聞こえる」が、まさに動作動詞性と存在動詞としての性質を融合させた語彙的意味を持つことを主張する。

本論文の構成は次のとおり。次節において、対応する他動詞である「見る」・「聞く」の語彙的意味の視点から「見える」・「聞こえる」の意味構造を考察する。続く2節では、虚構移動の観点から「見える」と「聞こえる」の意味構造を分析する。3節では、

1節および2節で得られた意味構造を元に、これらの動詞が持つ状態性と動態性を明らかにする。最後に4節で、まとめをおこなう。

## 1 対応する他動詞から見た「見える」と「聞こえる」の意味

「見える」と「聞こえる」は、意味的にも形態的にも「見る」と「聞く」に対応する（早津 1989）。本節では、「見る」と「聞く」の対照にもとづいて、「見える」と「聞こえる」の意味構造を分析する。

直感的には、「見る」という動詞は、視覚的探索活動に加え、主体による対象の視覚的把握を意味するように思える。例えば次の例文は、主体である「校長」による「騎手の顔」の視覚的把握を意味するように見える。

- (2) 校長は雪から来る強い反射を透して鋭くまっさきの旗手の顔を見た（大礼服の例外的効果）

しかし、実際はそうではない。飯田（1997）と小出（2006）が指摘しているように、「見る」が視覚的把握を意味しないケースは数多く存在する。次の例文

を見てみよう。

- (3) 窓の外を見たが、何も見えなかった。

(3)は、全くの正文であり、矛盾は感じられない。このデータは、「見る」の視覚的把握の側面がキャンセル可能であり、語彙的な意味というよりもむしろ語用論的な意味を表現していることを示している。

一方、「見える」に関しては、次の文は矛盾文となる。

- (4) #窓が見えたが、見えなかつた。<sup>(注2)</sup>

これは、「見える」が視覚的な把握を語彙的に持っていることを示す。

(3)と(4)は、「見る」と「見える」が視覚探索活動の2つの側面をそれぞれ語彙化した動詞であることを示している。すなわち、探索活動としての側面を語彙化した動詞が「見る」であり、視覚的探索活動が成功した後の視覚的把握を「見える」が語彙化していると考えるのが適当である（飯田 1997; 小出 2006）。この状況は、「聞く」と「聞こえる」に関しても全く同様である。次の例文を見よ。

- (5) a じつと隣の部屋に耳を澄ませて聞いてみたが、何も聞こえなかった。

b # 歌声が聞こえたが、聞こえなかった。

すなわち、このケースでは、聴覚的探索活動を「聞く」が語彙化し、探索活動が成就した後の聴覚的な把握を「聞こえる」が語彙化しているわけである。

## 2 知覚的把握とは何か―虚構移動の観点から―

寺村 (1982) は、「見る」や「聞く」のような感覚動詞は、「ある対象を目ざしての感覚・感情の動き」を表現すると主張し、受身表現において主体がカラ格によってマークされることを、その証拠として提出している。<sup>(注3)</sup>

(6) 先方から見られる心配のない一瞥を与えながら、伸子は微かな戸惑いを心の隅に感じた。(「信子」)

(6)の「先方から」の部分は、微細なニュアンスの違いはあるものの、動作主を示す二を伴う「先方」に入れ替えてもほとんど意味の変化が感じられない。カラと二の交替は、「聞く」においても可能である。

次の例文を見よ。

(7) 今晚の会議の目的は、だいたいもうガイヤアル

君から聞かれたことでしょうが、こうして、諸君にお集まりを願ったというのは、諸君の智慧を拜借して、モン・ブラン登山の、嶄新奇抜な方法を発見したいためなんです。(「ノンシヤラ ン道中記―モンブラン登山の巻」)

(7)に出現するカラは、先の例と同様に、ほぼ意味の違いなく二に置き換え可能である。

寺村 (1982) は、(6)に例示されるようなカラ格が「起点」を表すと解釈し、起点を表すカラ格が動作主を示す二格と交替可能であることから、「見る」や「聞く」のような感覚動詞に「何らかの対象を直指しての動き」、すなわち、何らかの移動動作が係わっていると考えた。

同様の指摘は、英語圏での議論でも見られる。例えば、Gruber (1967) や Jackendoff (1983) は、視覚動詞 (look や see など) に関して、前置詞との共起関係をベースに、心的な移動動詞であると主張している。

これらの議論を受け、Talmy (2000) は、心的な移動に対して虚構移動 (fictive motion) という名前

を与え、包括的な研究を行っている。この研究を日本語の視覚表現に適用したものに松本(2004)がある。

では、「見える」と「聞こえる」はどうだろうか。

次の文が示すように、「見える」と「聞こえる」は、カラ格を取ることができる(荒1983;松本2004;高橋2008)。

- (8) a 京都の大学の教授がしばらく泊っていた  
旅館の窓が岸本の部屋から見えた。(「新生」)

b 長良川博士の声が、学者たちの後から聞こえた。(「海底大陸」)

本論文では、(8)までの議論にもとづき、「見える」と「聞こえる」に関しても、ある種の虚構移動が関わっていると考え、その移動を、松本(2004)に倣い「視覚的放射」と「聴覚的放射」と呼ぶことにしたい。

ただし、「見える」と「聞こえる」に関しては、その放射の方向性に関して大きな違いがある。視覚的放射が問題となる先の(8a)に関して言えば、その放射の起点がカラ格(「横手の窓から」)によって表現されているが、聴覚的放射が問題となる(8b)では、反対

に聴覚刺激の起点がカラ格で表現されている(高橋2008)。

この逆転現象は、「見える」と「聞こえる」に関して虚構移動の方向性が逆であることを示すものと解釈できる。すなわち、「見える」における視覚的放射は、「見る」主体から視覚刺激への虚構移動であるが、「聞こえる」における聴覚的放射は、聴覚刺激から「聞く」主体への虚構移動なのである。

このように放射の方向性について違いはあるものの、「見える」と「聞こえる」は、両者ともに感覚的な放射物が刺激の根源と結びつくことを意味する。では、これらの動詞と結びつく二格はどのように分析されるだろうか。

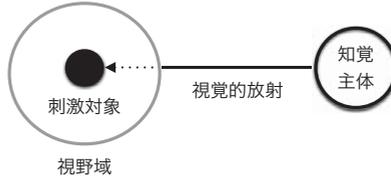
まず、「見える」について考えよう。次の例を見て欲しい。

- (9) ああごらん、あすこにプレアデスが見える。(「銀河鉄道の夜」)

この例では、視線を形成する放射物が移動し、二格でマークされる「あすこ」に到達し、視野域を形成する「あすこ」の中に刺激対象である「プレアデス」

が存在すると解釈できる（奥田1983<sup>(注4)</sup>）。この状況は、次のように図示できる。

(10)



(10)に図示されるように、視覚的放射の着点は二格でマークされ、その中で特にアテンションが向けられている対象（刺激主体）がガ格でマークされると解釈できるのである。

(10)に図示された状況の向きを逆転させたものが、「聞こえる」で示される状況である。次の例を見てみよう。

(11) a そういふどら声があちらこちらに聞こえた。

（病院風景）

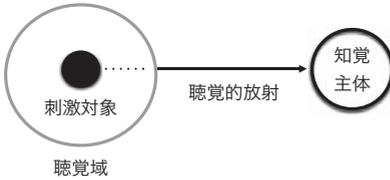
b がさがさした、けれども親切そうな、大人おとなの声が、二人ふたりのうしろで

聞こえました。（銀河鉄道の夜）

（銀河鉄道の夜）

(11)の2つの例文は、音の発生源（刺激対象）をガ格で、そして、それが存在する場所（聴覚域）が二格もしくはデ格で示している。これを図示すると次のようになる。

(12)



ここまで述べてきたように、「見える」と「聞こえる」は、放射の向きという差異はあるものの、刺激対象の存在、知覚域、知覚者の3つの関与者を語彙化している。

しかし、知覚者が文中に出現することはあまりなく、以下の例文のように、対比の文脈やある種の強調の場面のみ観察されると思われる。

(13) a それから数日間、青洲は加恵のところを

訪ねなかったが、乳の裂傷を縫った患者の枕許にじっと坐って動かない夫の姿が加恵には見えるようであった。(「華岡青洲の妻」)

b 私、聞こえるよ。

これは感情・感覚動詞に見られる現象であり、これらの動詞のスル形に観察される人称制限によって、知覚者が一人称に限定されるからと考えられる(畠山2012)。

### 3 「見える」と「聞こえる」に見られる状態と動作の二重性

前節での議論から、「見える」と「聞こえる」が状態動詞と動態動詞の性質をあわせもっていることが説明可能である。

まず、スル形が発話時指示が可能であるという状態動詞性に関しては、これらの動詞が「刺激対象が知覚域に存在する」という状態を語彙化しているからと説明できる。「見える」と「聞こえる」は刺激対象が位置する空間を二格によってマーク可能であるが、このデータも、知覚域における存在を語彙化しているという本論文での立場を裏付ける。次の例文が示すように、存在を表現するアルは、その存在の場所を表現する格助詞として二格を要求する(寺村1982; 奥田1983; 益岡・田窪1992)。

(14) a 大宮の別荘も鎌倉にあった。(「友情」)

b \*大宮の別荘も鎌倉であった。

(15) a ああごらん、あすこにプレアデスが見える。(「銀河鉄道の夜」)

b \*ああごらん、あすこでプレアデスが見える。

(16) a そういうどら声があちらこちらに聞こえた。(「病院風景」)

b そういっどら声があちらこちらで聞こえた。ただし、(16b)が例示するように、「聞こえる」に関しては場所のデ格も可能である。この現象に関しては、「音」の出現・存在には必ず何らかの活動が必要であり、その活動にフォーカスがあたった場合はデ格が使用されると本稿では考える。

このように考えると、奥田(1983)が指摘するように、「場所ニ：ガ見える／聞こえる」という構文パターンは、存在構文に非常に近い性質を持つ。例えば、先の「あすこにプレアデスが見える」は「あすこにプレアデスがある」とほぼ同じ意味を持つであろう。このように「状態」の典型である存在を語彙化するが故に、「見える」と「聞こえる」は状態動詞性を示すのだが、動態動詞と同様の性質を持つという点はそのように説明されるのだろうか。

これは、「見える」と「聞こえる」が両者ともに虚構移動の側面を語彙化しているためと考えられる。すなわち、(10)および(12)に図示されている視覚的放射と聴覚的放射は、心的ではあるものの何らかの「活動」を意味しているため、「見える」と「聞こえる」が動

態動詞の特質を持つと考えられるのである。したがって、これらの動詞に承接するシハジメルは、視覚的・聴覚的放射の開始局面を表現する。ただし、「見える」の場合は、視覚的放射の開始局面を意味するだけでなく、刺激対象の視覚域への侵入を意味する場合もある。例えば、次の場合は、知覚者の移動に伴って、刺激対象が視覚域へと侵入してきているという局面が描写されているように思われる。

(17) 眠りに静まっている鹿苑寺本堂をあとに、唐門の前をとおって、私は金閣への道を辿った。金閣が見えはじめた。(「金閣寺」)

この文が表現する事態は、「私」と金閣寺の間に視覚的放射が確立しはじめたことに加え、「私」が移動するにしたがって、「金閣寺」が視野域に侵入しはじめていることを示している。

(17)のような例は、おそらく「聞こえる」には存在しないであろう。これは、聴覚は指向性が乏しいため、「聴覚域への侵入」のような微妙な局面を感知しにくいためと考えられる(松本2004)。

#### 4 おわりに

本論文では、「見える」と「聞こえる」について、その状態動詞性と動態動詞性について虚構移動の観点から考察を加えた。

#### 参考文献

- Gruber, J. S. (1967). Look and See. *Language*, 43(4), 937-947.
- Jackendoff, R. (1983). *Semantics and Cognition*. MA, Cambridge: MIT Press.
- Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics*, Vol. I. MIT Press.

#### 【注】

- (注1) 本稿においては、作例でない限り、括弧内に引用文献の作品を入れる。
- (注2) 本論文では、#は許容できない文を示す。
- (注3) 渡辺(1983) および荒(1983)もカラ格との共起関係から同様の主張を行っている。
- (注4) (奥田1983, P.288) は、「認知活動をしめす動詞(みる、みうける、みえる、みあたる、ながめる、のぞむ、みつける、みいだす、発見する、みとめる、しる、きく、きこえる、かんじるなど)をひろげるに格の名詞は、その動詞との関係において、認知をうける物あるいは現象や状態のありかをしめしている」と述べている。
- 荒正子(1983)。「から格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』, pp. 397-425. むぎ書房
- 飯田透(1997)。「見える」「見られる」再考』『東京大学留学生センター紀要』, 7号, pp. 43-65. 東京大学.
- 奥田靖雄(1983)。「に格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』, pp. 281-323. むぎ書房
- 小出慶二(2006)。「知覚動詞の語彙構造について」『国文学研究』, 25号, pp. 1-16. 群馬県立大学.
- 高橋由布子(2008)。「知覚動詞のアスペクトと意味拡張―自己対応と主観性」『言語科学論集』, 14号, pp. 31-55. 京都大学.

寺村秀夫(1982).『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

「友情」(武者小路実篤)、「海底大陸」(海野十三)、「病院風景」(寺田寅彦)、「金閣寺」(三島由紀夫)

畠山真(2012).「感情表出動詞の人称制限と変化後の局面の二重性」『尚綱学園研究紀要 A, 人文社会学編』, 9号, pp. 63-77. 尚綱大学.

早津恵美子(1989).「有対他動詞と無対他動詞」『言語研究』, 95, 231-256.

益岡隆志・田窪行則(1992).『基礎日本語文法』改訂版』くろしお出版.

松本曜(2004).「日本語の視覚表現と虚構移動」『日本語文法』, 4(1), 111-128.

渡辺義夫(1983).「カラ格の名詞と動詞の組み合わせ」『日本語文法・連語論(資料編)』, pp. 353-395. くろしお書房

## 引用文献

「ある心の風景」(梶井基次郎)、「大礼服の例外的効果」(宮沢賢治)、「銀河鉄道の夜」(宮沢賢治)、「ノシシヤラン道中記」(久生十蘭)、「新生」(島崎藤村)、「